

run♪run♪ plazaが拓くジュニアナチュラルリストの未来 — ママによる、博物館における幼児向けプログラム実施の試みを中心に —

小西 真弓

(ひとはく連携活動グループ run♪run♪ plaza)

はじめに

run♪run♪ plaza (るんるんぷらざ) は、幼児から大学生の子どもを持つママを中心に2005年4月に結成したグループで、現在のメンバーは8名。女性のみで構成している。子どもたちが自然と出会い、自然と親しむことから得られる貴重な体験を通して子どもの持つ可能性や感受性を育てていけるような活動をしている。プログラムの企画段階から実施に至るまで、常にママの目線で見て考え、子育て経験を活かしたきめ細やかな対応を心がけている。プログラムにおける私たちの役割は先生や指導者になることではない。一段高いところから知識を与えるのではなく、子どもたちと同じ場所に立って自然の中でもともに感動し、子どもを通してその保護者ともまた感動を共有する姿勢を大事にしている。専門的な知識をもって指導にあたるのは、あくまでも専門家である博物館の연구원などに委ねることで、より高度な学びが可能になると思うからである。

この報告では、この3年間に行ってきた活動を振り返ると共に、私たちが目指しているものについて明らかにしたいと思う。

1. 私たちが幼児向けプログラムにこだわった訳

私たちがママの目線で人と自然の博物館の展示や연구원のセミナーを見たとき、まず思ったのが「年齢の低い子どもを持つファミリーには敷居が高い」ということであった。同館の展示は視覚に訴えるものがほとんどで、触れてはいけないものも非常に多い。視覚のみで理解しなければならぬ展示は、幼い子どもたちには難しいと感じたからである。展示が理解できることが前提となっているためか、当然のこととしてセミナーの対象年齢もかなり高く設定されているものが多い。子どもの心に響くのは、触覚をはじめとする五感を駆使することで得られる認識によるものである。そこで、もっと早い時期から博物館に親しんでほしいとの願いから、幼児・小学校低学年児童が気軽に来館し館内や身近な自然で楽しむきっかけとなるようなプログラムづくりに取り組むこととなった(図1、図2)。

また、幼児の場合は保護者同伴が前提であるが、これから子育てをすることになる世代の保護者は、自身が自然と親しむ機会の少ない時代に育っていると思われる。さらに、昨今の子ども



図1. 幼児向けプログラム「かわいい春をみつけよう」の一場面

を取り巻く環境の変化はめまぐるしく、ましてやその中で子育てをしていくことは、いっそう難しくなっていくと推測される。

私たちは、子どもに一方的に教え込むのではなく、子どもたちとともに自然の中で発見をし、ともに驚き、ともに考える姿勢が大事だと考える。親子で参加するプログラムを提供することで、保護者と子ども双方の自然に対する興味・関心を喚起するとともに、保護者が自信を持って子育てができるような環境を提供することが、延いては子育て支援の一翼を担うことにはないかと思っている。

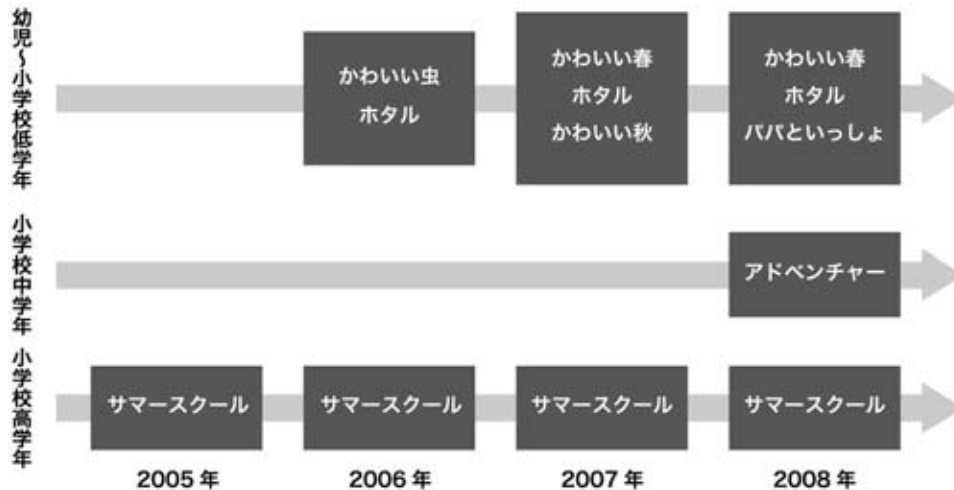


図2. run♪run♪plazaが3年間に実施した主なプログラムと2008年度に実施予定のプログラム
対象年齢別・実施年度別に示している。共催プログラム、イベントへの参加を除く。プログラムの名称は、本文を参照のこと。「サマースクール」は対象年齢が小学4年生から6年生であるため、実際は小学校中学年の部分にも一部かかっている。

2. これまでに実施したプログラム

2005年のデビュー企画「ひととはく博士と行く ハチ北高原サマースクール'05」を皮切りに、これまでさまざまなプログラムを実施してきた。年々プログラムの数、とりわけ幼児から低学年対象プログラムを重点的に増やしてきた(図2)。次に、その主なものを挙げて説明する。

1) 「ひととはく博士と行く ハチ北高原サマースクール」(小学校高学年対象)

事前・事後学習会を含む全5回のプログラムで、2泊3日の現地学習を兵庫県香美町のハチ北高原で行う。参加者は、昆虫・植物・岩石・星の四分野に分かれて観察・調査を行い、事後学習会(2006年度より2回実施)で標本や資料の整理をし、最後の発表会で成果をプレゼンテーションする(図3)。調査方法から成果のまとめに至るまで博物館の연구원など専門家から指導を受けており、夏休みの自由研究としては非常に質が高く、毎年市や県主催の理科展で受賞する作品も多い。

四年生から参加して、それ以降継続的に参加してくれる子どもたちが多く、このプログラムの特徴と言える。昨年までに3回実施したが、その年の気候や実施時期の違いで毎回異なるハチ北高原の素晴らしい自然を満喫することができた。また、現地学習の際のバスを神戸三ノ宮と三田市の人と自然の博物館の二カ所を発着場所としたため、参加者は広域にわたっている(吉田、2006)。

2) 「かわいい春をみつけよう！」(幼児～小学校低学年対象)

対象年齢を幼児から小学校低学年にまで引き下げた新しい企画「かわいい虫をみつけよう！」を2006年3月・4月・5月に実施した。これは、参加したファミリーが深田公園(博物館の周囲)で虫を捕まえ、各自その中で一番かわいいと思う虫を最後に発表してもらい、研究員の先生方から解説を受けるというものである。子どもたちに人気の“かわいい虫”は、ダンゴムシ・テントウムシなどであった。

また、2007年度はこのプログラムを更にパワーアップさせ、昆虫だけでなく植物などにまで範囲を広げて子どもたちの幅広い興味や関心により柔軟に対応していくため、タイトルも「かわいい虫をみつけよう！」から「かわいい春をみつけよう！」に一新し、4月・5月に実施した。回を重ねるごとに参加者も増加し、延べ約120名の参加があり、最年少は2歳であった。

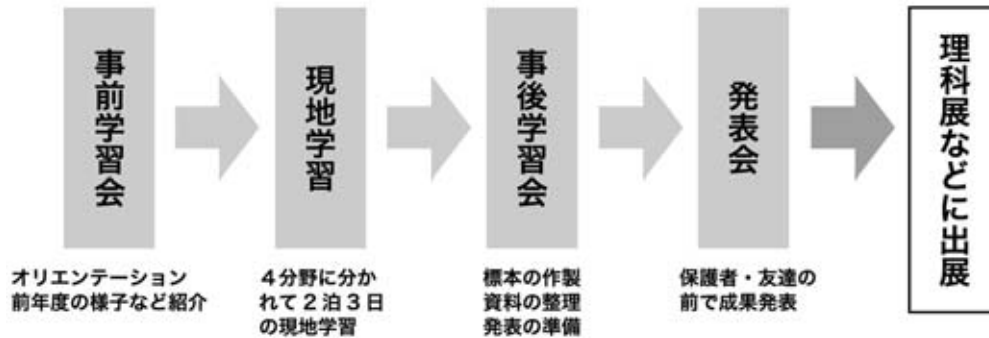


図3. サマースクールのプログラムの流れ

夏休み前に事前学習会を行い、7月下旬に現地学習に向かう。現地でのスケジュールについては、グループによって異なる。8月中に2回の事後学習会と発表会を行い、夏休みの自由研究を仕上げる。理科展には各学校より選抜された作品が展出される。

プログラム終了後には、当日の様子がよく分かるように写真を多く取り入れたニュースレターを発行し、参加者全員に郵送して参加者とのつながりを持てるよう留意した。

3) スペシャル企画（幼児～小学校低学年対象）

「かわいい虫をみつけよう！」の参加者にはスペシャル企画として6月に「今年はホタルをみにいこう！」を提供し、三田市内の川で「はじめてみるホタル」を楽しんだ。2007年度の「かわいい春をみつけよう！」参加者に対しては、「今年はザリガニつり&ホタルをみにいこう！」を江古花園（丹波市）で実施した。

また、2007年度には「かわいい秋をみつけよう！ さかせがわスペシャル」を10月に実施。逆瀬川（宝塚市）の川原で昆虫や魚を観察・採集し、日本で一番美しいと言われているアカトンボであるミヤマアカネのマーキングにも挑戦した。

3. run♪run♪plazaが目指すもの

1) 幼児期から青年期までの一貫したコースの設定

幼児から小学校低学年および高学年対象のプログラムについては年々充実を図ったが、今まで中学年を対象としたプログラムは行っていなかった。低学年向きでは物足りなく、高学年向きでは少し不安がある……。そういった中学年を対象に、プレ・サマースクールにあたる企画を考えた。三田市内の施設を利用して1泊での「昆虫アドベンチャー」を2008年度に実施する。これで、幼児から小学校高学年まで連続したプログラムが設定できたことになる（図2）。また、これに加えて幼児から小学校低学年児童とその父親を対象とした「パパといっしょの昆虫アドベンチャー」を7月に実施する。子どもにつきあって昆虫採集をするのは、父親であることが多いが、網を振り回してはいるが全く採れない、いくら探してもクワガタが見つからず、子どもに責められて困っているというような姿がしばしば見受けられる。そのような父親に虫採りのコツを伝授し、童心に戻って昆虫採集を楽しんでもらうのがその目的の一つである。

サマースクール修了後、中学生以降のコースとしては、博物館主催セミナーの「ユース昆虫研究室」へ、さらに高校生はひとく連携活動グループの「テネラル」に進学する道が拓かれている。これで、昆虫分野に関しては幼児期から青年期まで一貫したコースが設定できたことになる（図4）。このテネラルの高校生・大学生がスタッフとして私たちのプログラムをサポートしてくれている。彼らは参加した子どもたちと年齢が近いこともあり博物館の職員よりも身近な、まさに「頼れるお兄さん」的な存在である。子どもたちは彼らのうちに自らの近い未来の姿を見ている。そして、彼らもまた、子どもたちと関わる経験から多くを学んでいるのである。将来的には小学生でサマースクールに参加した子どもたちが、高校生になってスタッフとして参加してくれるようになる日も近く、非常に楽しみである。

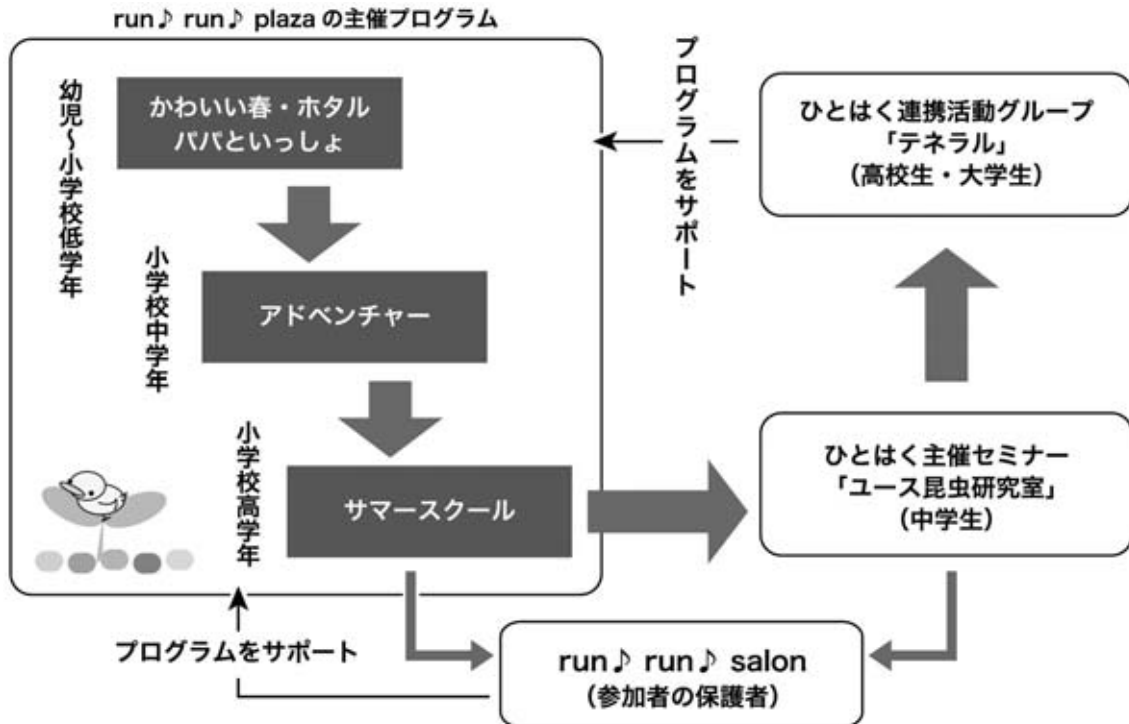


図4. 幼児から小学校高学年までの連続したプログラム設定と進学コースおよびサポートシステム
2007年現在、昆虫分野では、サマースクール修了後中学生になると、人と自然の博物館主催セミナー「ユース昆虫研究室」へ、高校生になると同館連携グループ「テネラル」へ進学する道が用意されている。プログラム参加者の保護者（ママ限定）の居場所としてrun♪run♪salonがあり、テネラルと同様にこのママたちもプログラムをサポートしてくれている。

2) ママたちによるママたちのための居場所づくり

プログラム参加者の保護者との交流を図るために随時run♪run♪salon（るんるんサロン）を開催している。親子で安心してプログラムに参加してもらえるよう、保護者から生の声を聞き今後のプログラムづくりに反映させるとともに、スタッフとしてママの経験を活かすことができるような機会も提供していく。2008年2月に開催したサロンでは、サマースクール参加者とユース昆虫研究室受講生のママたちにお集まりいただき、お茶を飲みながら終始和やかな雰囲気の中充実した時間が持てた。参加者したママたちからは「小学校中学年向けのイベントが無くて困っていた」「学校の勉強以上に『生きる力』をつけ、プログラムからさまざまな体感・実感をすることで人生の経験値を増やして欲しい」などの声が聞かれた。子どもを通してこのような機会が持て、日頃の悩みや疑問に思うことなどについて意見交換ができたことは大変有意義であった。このサロンの様子のほか実施したプログラムなどは、ブログでも紹介している。

<http://runrunplaza05.blog.so-net.ne.jp/>

4. まとめとこれからの課題

run♪run♪plazaのプログラムに参加することをきっかけとして、子どもたちは自然の中で生きる力をつけて逞しくなり、自然の中で得た経験を様々な分野に活かし、また、成果が評価されることによって自信へとつながると確信している。これらの能力は、これから価値観がますます多様になる社会で生きていくために最も要求されるものではないだろうか。

ジュニアアナチュラリストである彼らは、将来的に自信を持って自己を主張し、多くの選択肢の中から自らの進む道を見出すことができる人になるであろう。その可能性は無限に広がっているといえよう。どのような道を進むにしろ、自然の中で得た経験、またそこで関わった人々

との出会いは、後に必ずや生きてくるものと思っている。私たちはこれからもジュニアナチュラルリストを育むため、メンバー自らの子育て経験を活かしながら、ともに自然を楽しむような様々な企画を充実させていきたいと思っている。

そのためには、今後取り組まなければならない課題もいくつか考えられる。「サマースクール」修了後のコースとしては、昆虫分野のみ設定できているわけであるので、そのほかの分野についても漸次着手していかなければならないであろう。そのためにも、中学生になった子どもたちが興味のある分野で学び続けられるように情報を提供するなど、博物館とのより密接な連携が必要になってくると思われる。また、年々増加するプログラムをスムーズに行っていくためには、ある程度の数のスタッフが必要となる。run♪run♪salonを通して、ママたちとの信頼関係を築いていけるようコミュニケーションを図り、無理なく気軽に協力していただける雰囲気作りにつとめていきたい。

謝 辞

最後になったが、私たちの活動をいつもあたたかく見守ってくださり、専門的なアドバイス・ご指導をいただいている人と自然の博物館の八木剛主任研究員、加藤茂弘主任研究員、小舘誓治研究員、自然体験教育研究所主宰の足立勲先生、加古川市立青少年自然の家天文指導員の田中慎悟先生に感謝の意を表したい。

文 献

吉田やよい(2006)。ママが育むジュニアナチュラルリスト。共生のひろば1号, 18-19